



### (1) 事業の実施状況について

首藤定（1890～1959、大分県臼杵市出身）は、旧満州（中国東北部）の大都市、大連を中心に活躍した実業家であると同時に、美術品をこよなく愛し、その蒐集に情熱を傾けたコレクターとして知られる。また、第二次大戦の終結間もない混乱期に大陸にあって飢餓に苦しむ同胞を救うべく、ソ連（当時）側と交渉して大連に保管していた美術コレクションと食料を交換したという美談の持ち主でもある。その蒐集美術品は、引き渡しの際作成された「首藤定蒐集美術品目録」によれば、中国の書画や肉筆の浮世絵、近世の日本画、近現代の日本画、洋画、中国、朝鮮の陶磁器等561点に及んでいる。



首藤定肖像

同コレクションはソ連にわたったまま長らく行方がわからなくなっていたが、昭和49年、モスクワで存在が確認され、翌年、その一部である福田平八郎の作品42点（「首藤定蒐集美術品目録」では対幅を一つと数えた41点）が日本政府に寄贈される（現在京都国立近代美術館所蔵）など、存在が知られるようになった。また、平成12年度に横浜市や別府市で開催された「ロシア国立東洋美術館所蔵 首藤コレクション 幻の日本画名品展」では、近世から近代にかけての日本画118点（うち「首藤定蒐集美術品目録」に記載があるものは103点）が紹介され、さらに注目を集めるようになった。

しかし、コレクションの詳細は未だ不明であり、その全容解明には県民からも強い興味寄せられている。こうした状況を受け、予備調査となる平成15年度に4名、本調査（一次調査）となる16年度に5名の調査員をモスクワ市のロシア国立東洋美術館に派遣し、同館に所蔵される中国の陶磁器や書画、近世・近代の日本画等の作品を、引き渡しの際に作成された「首藤定蒐集美術品目録」と照合しながら、当該作品の所在を確認する作業を行った。平成17年度は本調査（二次調査）として、4名の調査員をモスクワに派遣し、ロシア国立東洋美術館の本館と別館において、陶磁器作品の精細な調査と、これまで未調査であった金工、竹工、漆工等の調査を実施することとした。

海外調査に先立っては、昨年度同様、外務省欧州局ロシア課およびロシア大使館を訪問し、ロシアとの外交上の調整を依頼した。また、書簡やFAX、電子メールを交わしながらロシア国立東洋美術館に調査の受け入れを依頼するとともに、在ロシア日本大使館を通して、訪問の日程等について協議した。

海外調査は平成18年10月1日（土）から8日（土）までの期間で実施した。往復の移動日をのぞき現地モスクワでの調査は5日間であった。調査団は大分県立芸術会館学芸第一課の学芸員と委嘱した外部調査員で構成した。調査員は下記の4名である。

- |       |                    |              |
|-------|--------------------|--------------|
| 佐藤 直司 | （大分県立芸術会館 学芸第一課長）  | ＜日本美術・近代日本画＞ |
| 友永 尚子 | （大分県立芸術会館 主幹学芸員）   | ＜日本美術・工芸＞    |
| 古賀 道夫 | （大分県立芸術会館 主任学芸員）   | ＜日本美術・近世絵画＞  |
| 出川 哲朗 | （大阪市立東洋陶磁美術館 学芸課長） | ＜東洋陶磁＞       |



ロシア国立東洋美術館本館



ロシア国立東洋美術館別館

10月3日（月）から4日（火）までは、ロシア国立東洋美術館本館の常設展示室において、展示されている中国・日本・朝鮮の陶磁器、金工品、文房具等のうち、ロシア側の調査により新たに首藤コレクションと確認された作品の調査を実施した。10月5日（水）から8日（土）にかけては、収蔵及び研究施設であるロシア国立東洋美術館別館（旧国立東方民族芸術博物館）に場所を移し、金工品の収蔵庫で金工品、竹工品、漆工品等の調査、また、陶磁器の収蔵庫で中国・日本・朝鮮の陶磁器の調査を実施した。

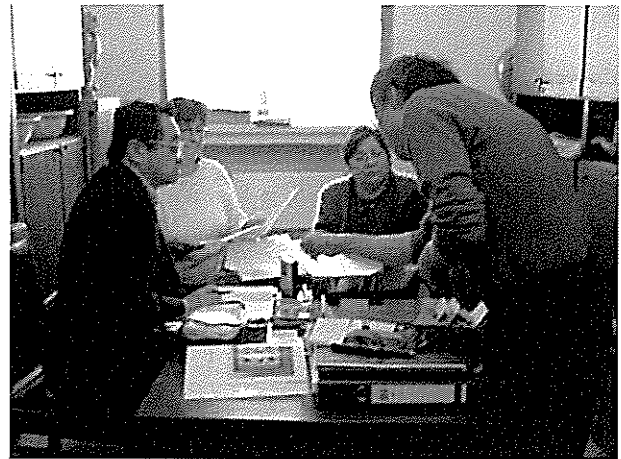
常設展示室で展示中の作品については、写真撮影は許可されたものの、展示ケースの外からの調査であったため1点1点手にとって調べることはできなかったが、ロシア側が調査した収蔵品番号等から、旧首藤コレクションの作品であることが、ある程度正確に判明した。収蔵庫での調査では、これまでと同様に、日本からの調査団が自由に作品を出し入れすることは許されなかった。したがって、ロシア国立東洋美術館の学芸員の手を煩わせて、作品を1点ずつ収蔵庫の収納ケースから出してもらうこととなり、調査には非常に長い時間がかかった。しかし、1点1点手にとって調べることができたため、数は少なかったものの、保存状態等細かな点まで十分に把握することができた。

こうした状況下での調査により、平成15年度に発見した79点（書画、工芸品）の作品、平成16年度に把握した53点（書画、工芸品）の作品に加え、平成17年度には陶磁器等工芸品59点（陶磁器34点、金工10点、仏像5点、ほか文房具等10点）を首藤コレクションの作品として新たに推定することができた。これにより、日本に返還された作品や日本での展覧会で紹介された作品、ロシア国内外の美術館に移管された作品を含め、561点のうち6割を越える作品の所在や内容を把握したこととなる。ただし、工芸品については、同じ作品名のものがいくつもあること、陶磁器などの工芸品が収納されていた本来の木箱が失われ伝来の手がかりとなるものが欠けていることなどから、今後の詳細な調査によって作品が入れ変わってくる可能性もある。

一方、「首藤定蒐集美術品目録」に記載されていないながら、現在所在が不明となっている日本画、中国画、洋画作品については、今年度も聴き取り調査を実施したが、やはり収蔵先は把握していないとの回答であった。これについては、エルミタージュ美術館やサンクト・ペテルブルグ民族博物館等にも文書等での照会を試みたが、所有しているとの返答は

得られなかった。

ロシア側の学芸員らとの協議の場では、本年度のプレゼンテーションについての話題のほか、首藤コレクションを軸とした展覧会や共同研究等両館の将来的な交流のあり方についても、発展的な意見の交換を行った。このように、3カ年の調査において構築された友好な関係を、さらに継続させ、発展させることが、首藤コレクションの全容解明のためには、今後必要となるだろう。



調査風景（陶磁器収蔵庫）

## （２）地域との連携について

帰国後、平成15年度から17年度にかけての調査結果をふまえ、調査に携わった芸術会館学芸員と外部調査員、そしてロシア国立東洋美術館の学芸員を交えて、調査事業の成果やロシア国立東洋美術館における首藤コレクションの研究成果等についてのプレゼンテーション、およびパネルディスカッションを実施した。首藤定の出身地である臼杵市をはじめ、県内各地より集まった約500名を前に、本調査事業の成果と首藤コレクションの実態が、さまざまな角度から紹介された。作品図版に接した参加者からは、是非大分でも公開してもらいたいなどの感想が寄せられた。



パネルディスカッション

会の詳細は以下のとおりである。

- ・名 称 芸術会館海外美術品調査事業 モスクワ・ロシア国立東洋美術館所蔵首藤コレクションのプレゼンテーション
- ・日 時 平成18年2月2日(木) 13:00～16:00
- ・会 場 平和市民公園能楽堂
- ・プログラム
  - 開会行事 開会挨拶 来賓紹介
  - 基調講演
    - ①ロシア国立東洋美術館の歴史と展示  
イヨガンソン ボリス（ロシア国立東洋美術館 国際部部长）
    - ②首藤コレクション受け入れの経緯／首藤コレクションについて 日本画  
カネフスカヤ ナタリア（ロシア国立東洋美術館 調査部主任）
    - ③首藤コレクションについて 磁器、金工  
クィズィミンコ ラリサ（ロシア国立東洋美術館 調査部部长）

- ④首藤コレクションについて 陶器、竹工、その他  
 シモチカワ リディア（ロシア国立東洋美術館 調査部副部長）  
 ○パネルディスカッション「首藤コレクションの特色について」  
 <パネリスト> クィズィミンコ ラリサ  
 カネフスカヤ ナタリア  
 シモチカワ リディア  
 出川 哲朗（大阪市立東洋陶磁美術館学芸課長）  
 富田 章（サントリー美術館〔天保山〕 主席学芸員）  
 友永 尚子（大分県立芸術会館主幹学芸員）  
 古賀 道夫（大分県立芸術会館主任学芸員）  
 <コーディネーター> 佐藤 直司（大分県立芸術会館学芸第一課長）  
 ○閉会行事 閉会挨拶

### （３）成果物について

平成１７年度に実施した海外調査とプレゼンテーションの内容をまとめた「平成１７年度芸術会館海外美術品調査事業報告書」発行し、関係諸機関に配布した。主な内容は以下のとおりである。

- ・平成１７年度調査の概要について  
 大分県立芸術会館 学芸第一課長 佐藤直司
- ・ロシア国立東洋美術館の金工、竹工、漆工品等について  
 ロシア国立東洋美術館 調査部部長 クィズィミンコ ラリサ
- ・新たに確認された首藤コレクションの陶磁器について  
 大阪市立東洋陶磁美術館 学芸課長 出川哲朗
- ・首藤コレクションの金工、竹工、漆工品等について  
 大分県立芸術会館 主幹学芸員 友永尚子
- ・プレゼンテーション（基調講演／パネルディスカッション）

### （４）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

大分県にゆかりのある作品の調査をとおして県関係美術の基礎資料を充実させるとともに、海外調査の難しさを経験したりロシア側の学芸員らと意見を交わすことで、当方の学芸員の資質を高めることができたと思う。この成果を今後の美術館事業の企画・運営に生かすことで、より魅力のある美術館活動を県民に提供できると考える。一方、まだ研究体制が十全とはいえないロシア国立東洋美術館の学芸員らは、本事業により生まれた協力関係を自らの研究を進展させる好機とも受けとめており、引き続き首藤コレクションに係る調査・研究の成果を提供することなどにより、ロシアにおける中国美術、日本美術研究にも寄与できると考える。

また、プレゼンテーションには、定員（３００人）を大きく上まわる５００人の聴衆が集まり、本調査への理解と首藤コレクションに対するさらなる関心を得ることができた。こうした気運のもと、将来的には、首藤コレクションを媒介とすることで、県民レベルでのロシアとの文化交流活動を活発にすることも可能となろう。